
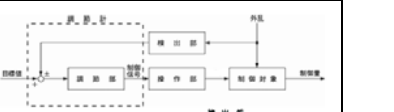

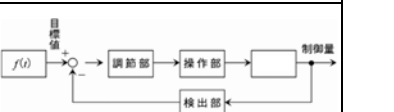
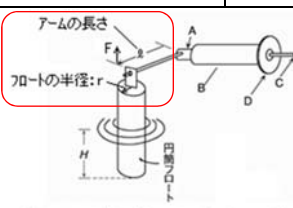
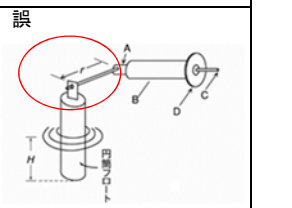
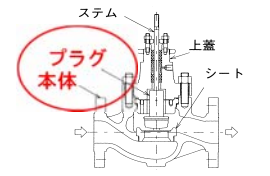
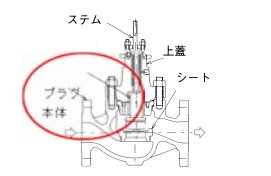
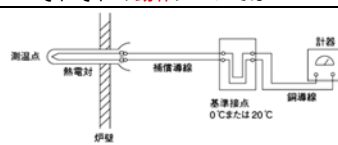
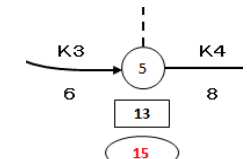
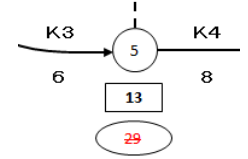


頁	箇所	正	誤
P.12	下から2行目	実際には 真値 というものは・・・	実際には 直値 というものは・・・
P.22	図1.8.3	 文字追記 操作量	 誤
P.24	下2行	(7) a. $A+B = \bar{A} \cdot \bar{B}$ b. $A \cdot B = \bar{A} + \bar{B}$ c. $A \cdot B = \bar{A} + \bar{B}$ d. $A \cdot B = \bar{A} + \bar{B}$ 削除	(7) a. $A+B = \bar{A} \cdot \bar{B}$ b. $A+B = \bar{A} \cdot \bar{B}$ c. $A \cdot B = \bar{A} + \bar{B}$ d. $A \cdot B = \bar{A} + \bar{B}$
P.31	図1.8.9	 文字追記 制御対象	 誤
P.83	表2.2.2 使用温度範囲	使用温度範囲 E: -200℃～700℃ J: 0℃～600℃ T: -200℃～300℃	使用温度範囲 E: -200℃～1700℃ J: 0℃～1600℃ T: -200℃～1300℃
P.95	最上行	(JIS C 1611-1995)	(JIS C 1611-1975)
P.118	1行目,2行目 図2.3.15	パーシャルフリュウム	パーシャルフリュウム
P.123	数式	ベルヌーイの定理 数式の γ (比重量[kg/m ³])の記載を ρ (密度[kg/m ³])に修正	
P.124	修正箇所	$\gamma \rightarrow \rho/g$ $\gamma \rightarrow \rho/g$ $\gamma \rightarrow \rho/g$	
P.129	数式	(8)密度(標準状態)(ρ_N) (8)密度(標準状態)(γ_N)	
P.130	数式	以降、 γ (ガンマ)を ρ (ロー)に修正	
p.136	数式	流量計④図の右側記載の数式、ただし書き部分、および下から3行目 γ (ガンマ)を ρ (ロー)に修正	
p.126	1行目 数式	$Re = \frac{Du \rho}{\mu} = \frac{(\text{管の内径}) \times (\text{流速}) \times (\text{流体の密度})}{(\text{流体の粘度})}$	(流体の密度)⇒(流体の粘度)
P.131	(c) 図中	25.4 mm	25.4 cm
P.144	図2.4.1 ディスプレイ メント式 レベル計	図中に追記 F:浮力 l:アーム長 r:円筒フロートの半径 	誤 
P.152	レベル計③	ρ :タンク内液体の 比重量 ρ_1 :導圧管内の液体の 比重量 1kgf/cm ² = 100kPa	ρ :タンク内液体の 密度 ρ_1 :導圧管内の液体の 密度
P.176	表の下 中央 下から5行目	1inch=25.4 mm exactly	1inch=25.4 mm exactly
P.176	表の下 右 下から3行目	Density of standard sea water	Density of standard sec water
P.181	上から4行目	誘導電流が 検出トイダルコイル に発生する	誘導電流が に発生する
P.208	上から5行目	制御量(測定値) が増加すると・・・	偏差(目標値-実際値) が増加すると・・・

頁	箇所	正	誤
P.265	図2.8.8 グローブ弁 構造図		
P.266	上から12行目	プラグには バランスポート ・・・	プラグには バルブポート ・・・
P.276	下から3行目	図2.8.19の粘度補正曲線・・・	図2.8.20の粘度補正曲線・・・
P.277	上から9行目	差圧が $\Delta P \geq 0.5F_L^2 P_1$ の場合に	差圧が $\Delta P < 0.5F_L^2 P_1$ の場合に
P.287	図2.8.27 右	イコールパーセンテージ 特性弁の・・・	コールパーセンテージ 特性弁の・・・
P.290	上から14行目 上から15行目	・正動作=偏差(目標値と 実際値 の差)が・・・ ・逆動作=偏差(目標値と 実際値 の差)が・・・	・正動作=偏差(目標値 - 実際値)が・・・ ・逆動作=偏差(目標値 - 実際値)が・・・
P.290	上から16行目 上から17行目	(b)調節弁の 作動 には、正作動と・・・ それぞれの 作動 については・・・	(b)調節弁の 動作 にも、正作動と・・・ それぞれの 動作 については・・・
P.404	最上段 図3. 5. 1	図を削除	 図3. 5. 1 補償導線の結線例
P.412	表3.5.5	TXの許容差 クラス1 ±30(±0.5℃)	TXの許容差 クラス1 ±30(±1.5℃)
P.412	表3.5.6 タイトル	表 3. 5. 6 補償導線の使用区分	3. 5. 6 補償導線の使用区分
P.476	配管資③ 下から2段目	JIS G 3459 配管用ステンレス鋼管	JIS G 3459 配管用ステンレス鋼管
P.486	図3.8.8	ケーブルラックの懸垂形支持 図中の記号 W	ケーブルラックの懸垂形支持 図中の記号 L
P.486	下から6行目	ラック幅を W とすると、吊ボルトの間隔は (W+40)mmとするとよい。	ラック幅を L とすると、吊ボルトの間隔は (L+40)mmとするとよい。
P.496	上から6行目	耐熱 シール材の厚みなど	耐圧 シール材の厚みなど
P.509	下から5行目	・・・防振対策をとっている場合は、盤との間に適 当なクリアランスを	・・・防振対策をとっている場合は、 盤と 構造体 との間に適当なクリアランスを
P.517	上から4行目	設計用鉛直地震力 $F_v = K_v \cdot W = 0.75 \cdot 6 = 4.5$ [kN]	設計用鉛直地震力 $F_v = K_v \cdot W = 1.0 \cdot 9 = 4.5$ [kN]
P.517	下から10行目	コンクリート厚 120 [mm] の壁に	コンクリート厚 100 [mm] の壁に
P.518	上から4行目	コンクリート厚 120 [mm] の基礎に	コンクリート厚 100 [mm] の基礎に
P.519	下から3行目	数式 $R_{b1} = \dots l_2$	数式 $R_{b1} = \dots l_2$
P.541	図4. 1. 4	K3(イベント5)の最遅完了日は 15 (K5(イベント4)の最遅開始日の制約を受けるため) 	K3(イベント5)の最遅完了日は 29 
P.551	下から10行目	・・・T×Kよりも 切断 荷重の値の方が大きい	・・・T×Kよりも 安全 荷重の値の方が大きい
P.551	下から8行目	ワイヤロープの 切断 荷重 $\geq T \times K$	ワイヤロープの 安全 荷重 $\geq T \times K$
P.551	下から5行目	ワイヤロープサイズと 切断 ・安全荷重の関係を	ワイヤロープサイズと安全荷重の関係を
P.590	図4.6.4 施工要領	ドレンバルブについての考えは 図 4.6.2 液体 サービスと同様である。	ドレンバルブについての考えは 図 4.6.5 液体 サービスと同様である。
P.855	①グローブバルブ	Globe valve	Glove valve